

1. 事業の目的

GIGAスクール構想で整備された児童生徒端末から日々入力される各種教育データを効果的に活用することで、児童生徒の心情の変化や自己肯定感等を把握するとともに、早期に児童生徒理解に基づく適切な支援を行い、不登校の未然防止につなげるための効果測定を行い、教育の質的向上に向けた今後の学校教育環境整備に資するモデルを構築する。

2. 事業内容

学習プラットフォームのアプリの実証研究及び活用状況の記録

実証アプリ	内 容
きもちメーター ＜健康観察アプリ＞	児童生徒が毎日の健康状態を1人1台端末から送信することで、日々の児童生徒の心の様子や変化を把握する。
アイグロ AiGROW ＜非認知能力アンケート＞ ※小学校4年生以上対象	年に2回程度非認知能力アンケートにより児童生徒の気質と思考力・表現力・判断力等の行動特性を測定・可視化したものを、児童生徒理解、授業改善、学校運営に活用する。

(実証校数) R4：3校(小2、中1)
R5：14校(小9、中2、高2、特1)
R6：14校(小9、中1、義1、高2、特1)

3. 健康観察アプリ 非認知能力アンケートの成果と課題

(成果)

- ・ 教員は、従来の個別観察に加え、健康観察アプリケーションを活用することで、多角的な児童生徒の見守りが可能となり、早期の声かけや支援といった迅速な対応を実現した。
- ・ 相談ボタンの有効性は教員及び児童生徒双方に認識されており、教員は相談内容の把握速度が向上し、児童生徒は相談への心理的ハードルが低下したことで、これまで以上に児童生徒の声を聞き取ることができた。
- ・ 体調不良や気分の不調が継続した場合に自動的にアラート表示される機能は、対象となる児童生徒への確実な声かけを可能にし、その有効性が確認された。
- ・ 児童生徒が健康観察アプリに自身の健康状態や気分を登録することで、自らの状態を客観的に把握する契機となった事例が見られた。
- ・ 中学校区として育成すべき児童生徒像を共有し、継続的に教育活動に取り組んだ結果、非認知能力の向上傾向が認められた。

(課題)

- ・ 児童生徒が意思表示した事項に対する学校側の具体的な対応策、並びに校内における連携体制及び対応手順の明確化と確実な運用が求められる。
- ・ 児童生徒が自身の体調や心理状態に向き合うことを習慣化し、回答漏れなくデータを蓄積するための効果的な方策、及び蓄積されたデータをすばやく把握するための仕組みの構築が必要である。
- ・ 他のアプリケーションと同様に、名簿更新作業等に依然として労力を要する現状がある。データ共通化による各種アプリケーションとの連携、及び一括処理が可能な仕組みの構築が課題である。
- ・ 非認知能力アンケートの実証アプリについては、「児童生徒の資質向上に向けた取組みにつながった」と回答した教職員が半数に満たなかったことから、アプリの選択やその導入効果等についてさらなる研究が必要である。

4. きもちメーター、AiGROW 活用アンケート調査実施時期

令和7年3月

5. きもちメーター、AiGROW 活用アンケート実施対象

令和6年度実証校の児童生徒、教職員

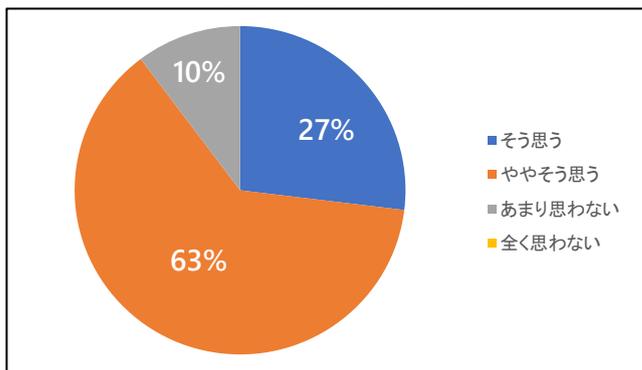
回答数 児童生徒 : 1,014人
教職員 : 78人 (AiGROWは63名)

6. 調査結果

(1) きもちメーターアンケート

【教職員】（回答：78名）

○きもちメーターは児童生徒の状況を把握することに役立ちますか？



(R 7.3)

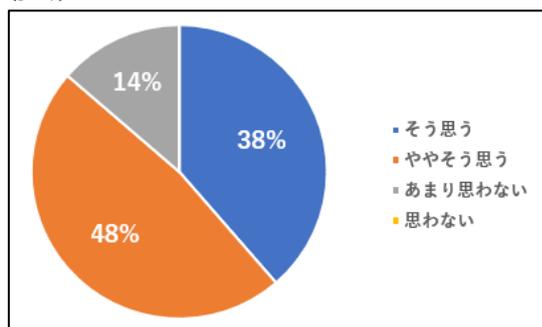
(回答した理由)

- ・面談が必要な児童や、悩んでいる児童を把握しやすい。こちらも声をかける理由づけにもなる。
 - ・口頭で聞くより生徒が率直に回答している。
 - ・選択肢があることで、低学年の児童でも自分の体調や気持ちを可視化しやすいから。
 - ・担任外が同じスピード感で情報共有できる。さらに必要な人間が互いに声を掛け合い、対応の検討もしくはチームでの会議に挙げるのか検討できる。担任でなくチーム対応できる。
 - ・身体面だけでなく、心の状況も把握することができるから。保健室対応時に心身の健康状態を事前に把握しておくことで、保健指導に役立つから。
 - ・グラフを見ることで季節的な変動や成長を感じることができるから。
 - ・いじめの早期発見につながった。
- △アンケート結果を見る暇がない。
△健康観察と気持ちメーターの併用が二度手間になってしまった。

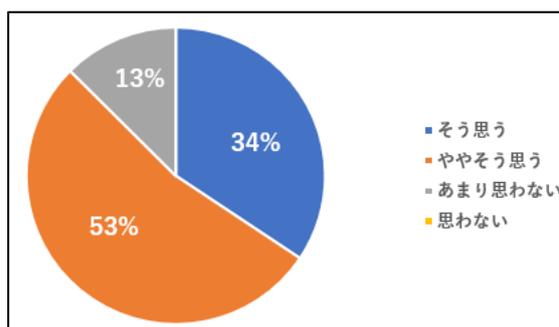
(改善が期待される点)

- ・送信された内容が即時に反映されるようになる。
- ・回答していない児童に通知がいくようにする。
- ・名簿更新作業がとても大変だった。各種アプリが連携して一括でできるとよい。
- ・児童生徒が自分の体調や心理面と向き合うことをいかに習慣化できるかが肝になる。習慣化された中で、データを本人にも提示することや学校側がどのように管理してどのように本人に返していくのかまで自動化して提案できるようなシステムがあれば、業務量が必要以上に増えることはない。
- ・AIと連動して気になる児童生徒を自動的にピックアップできるようになると、教師の経験とAIの力の協働が期待できると思います。また、現状他の効果的な対策がない限りは活用することがよいと思います。
- ・「入力しない」という選択をとる児童生徒の傾向もわかるとよいと思いました。
- ・入力していない児童生徒にポップアップを提示したり、その日児童が実施しないとタブレットが使えないようにする。
- ・「イライラしている」「悩んでいる」と答えた子が、すぐにわかるようになると声をもっとかけやすくなる。
- ・生徒が意思表示したのに、対応されない危険性もある。校内で「担任」任せではなく、誰が主として対応するのかを決めておく連携の重要性和「抜け」の排除が課題だと感じる。

[参考]



(R 5.1 0)

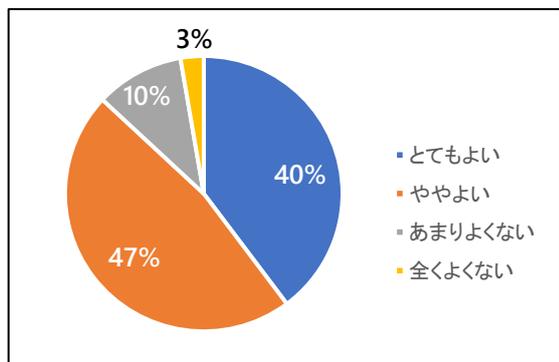


(R 6.4)

【児童・生徒】

○きもちメーターで、体調や気持ちをこたえることについてどう思いますか（一番気持ちに近いものを選んでください）

<小学校>（回答：445名）



（回答した理由）

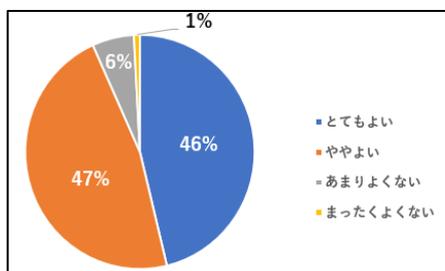
- ・人前で辛い症状などを話すのは恥ずかしかったから気持ちメーターになってとても良かったです。
- ・気持ちを知ってもらって事で心配してくれるから。
- ・自分がしんどかった時に健康観察の時にみんなの前で言うと私は少し恥ずかしいので気持ちメーターで言うと先生だけに伝えられるのいいと思います。
- ・朝、毎日自分の気持ちについて考える機会を作ること自分の気持ちをより素直に、理解できる。

△もうちょっと答える項目を少なくしてほしいです

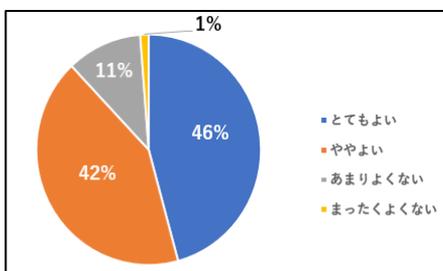
△健康観察をしているから。

(R 7.3)

〔参考〕

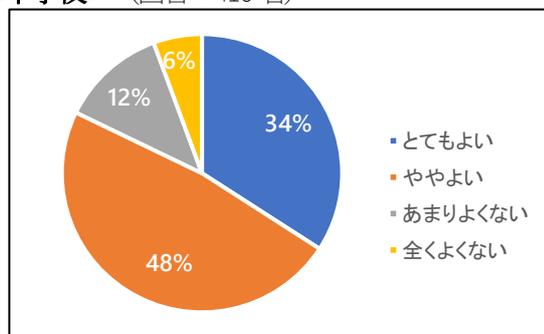


(R 5.1.0)



(R 6.4)

<中学校>（回答：410名）



（回答した理由）

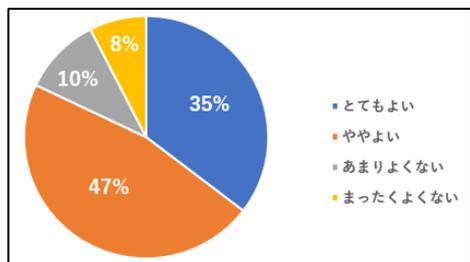
- ・簡単に健康状況を入力できるから
- ・全校生徒に配布されているタブレットを使うことはとても効率的だと思うのでとてもよいと感じました。
- ・言いにくい人が言えると思うから、全体の時間を取らないから
- ・人に気持ちを伝えることが苦手な人もいると思うから。
- ・体調を考えられるから
- ・体調が悪いか自分でも気づけることができるから。

△めんどくさい 忘れることがある

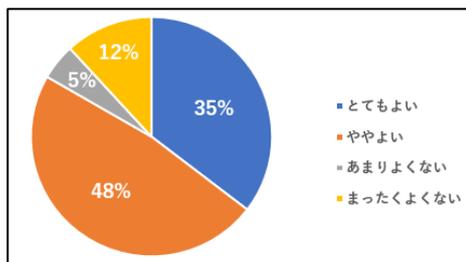
△誰が見ているのかわからないから

(R 7.3)

〔参考〕

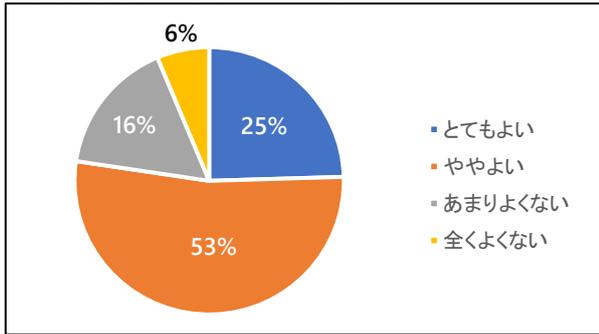


(R 5.1.0)



(R 6.4)

<高等学校> (回答：159名)



(回答した理由)

- ・自分の今の思いを伝えられるから。
 - ・体調や相談ができる。
 - ・先生方がすぐに生徒の体調の悪さや良さがわかるから直接では言えないことを打ち込めるから。
 - ・人に気持ちを伝えることが苦手な人もいると思うから。
 - ・相談したい事みたいなので気持ちを言いやすい
- △やるのがめんどうだから。
△相談したいことを聞いてくれるのはいいけど、体調まで聞かなくても自分から直接言えばいいと思う。

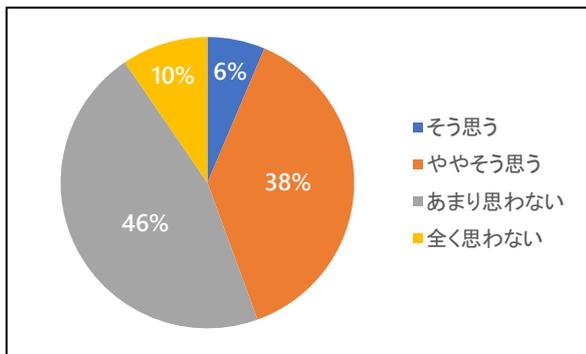
(R 7.3)

※R5.10 及び R6.4 はアンケート実施なし

(2) AiGROW 活用アンケート

【教職員】 (回答：63名)

○AiGROW の実施によって主体性や協働性等の非認知能力を把握することは、児童生徒の資質・能力向上に向けた取り組みにつながりますか (教職員のみ)



(R 7.3)

- ・友達からの他者評価もあり新しい視点で捉えることができた。
- ・今まで非認知能力を数値化することができなかったが、それが可能になった。
- ・学校全体での取組の効果やつけたい力が本当についているかデータとして検証できる。
- ・非認知能力を把握することができ、学級経営や個別の支援に繋げることができると思うから。
- ・数値としてみるので指標として役立つ。
- ・自分の診断結果に興味をもって取り組んでいる生徒がいたから。
- ・生徒のプラス面の評価が中心返ってくるので、生徒も自己肯定感が少しもてたのではないかと感じた。

△質問内容が難しく、正しい回答になっているかわからないから。

△他者評価や自分自身の評価ができていない生徒が多く、信用性に不安がある。

△質問事項が多く、質問の文章も長いため、適当に回答している生徒がいた。もっと簡潔な内容で短い診断になれば生徒が飽きずに取り組むことができるのではないか。

※R5.10 及び R6.4 はアンケート実施なし

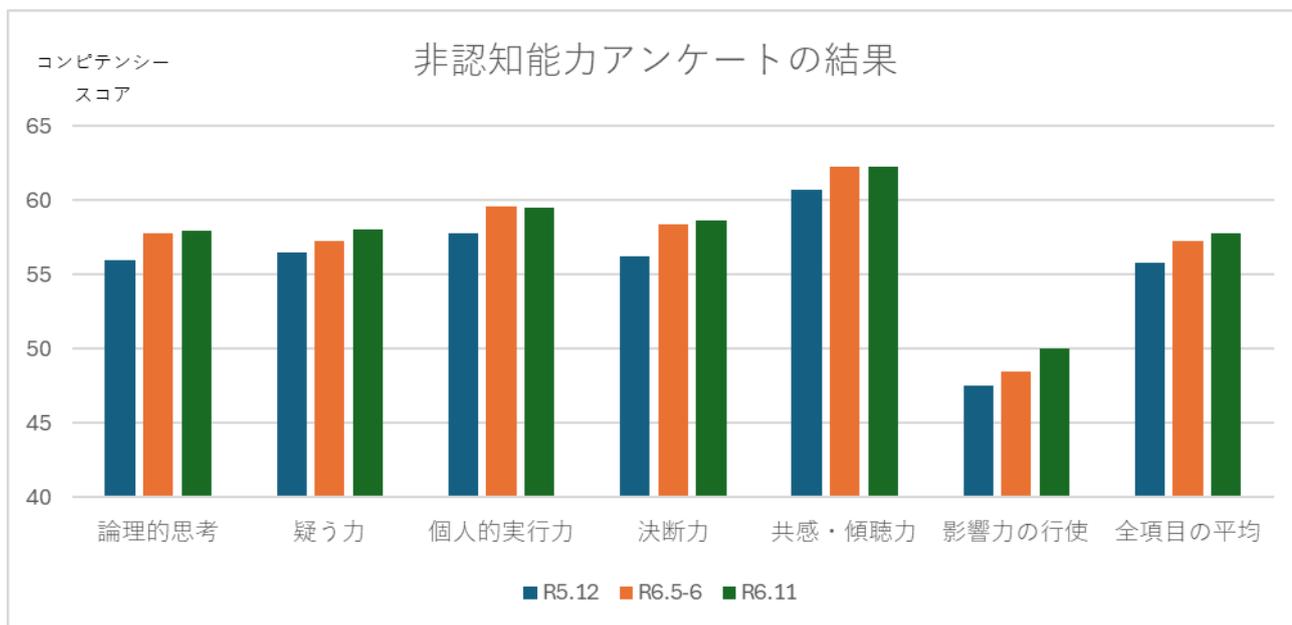
7. 実証中学校区で健康観察アプリ、非認知能力アンケートに取り組んだ結果
不登校の出現率（小・中・義務教育学校）

R5.8 時点と R6.8 時点の比較

	R5.8 時点	R6.8 時点	比較
中学校区で取組んだモデル校(%)	2.48	1.94	-0.54
県平均 (%)	1.80	1.92	+0.12

0.66 ポイント出現率が低い

非認知能力アンケートの結果比較（R5.12、R6.5-6、R6.11 の比較）



8. 今後について

一人一台端末を活用し、心身の状態の変化をダッシュボード等で可視化するとともに、相談ボタンや体調変化アラート等の機能を活用することは、多角的な視点からの早期発見・早期支援に有効であることがわかった。一方で、データを一目で確認できる仕組みや、他のデータとの比較分析を通じて指導に活かせるツールの開発には課題が残る。今後、本実証事業で得られた知見を踏まえ、汎用的なツール（Google Forms、スプレッドシート、Looker Studio 等）を活用できる仕組みについて検討を進める。また、教育データを基盤として、教職員にとってはよりきめ細やかな指導・支援、児童生徒にとっては自身の学びの振り返りを可能とするよう、データを効率的に収集・統合・分析できる共通基盤の整備を検討するとともに、教育の質の向上に資する具体的な事例を示すことで、教育データの利活用を積極的に推進する必要がある。